

特集展示「年号と朝廷」

Featured Exhibition “The Name of Era and the Court”
KOJIMA Michihito

小島道裕

趣旨と概要

共同研究「広橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究」の成果を多くの人と共有し、また館蔵の豊富な年号関係資料を広く公開するために、特集展示「年号と朝廷」を開催した。

期日は、二〇一七年九月一二日（火）～一〇月二二日（日）、会場は総合展示第三展示室（近世）の特集展示室「ものから見る近世」を使用した。以下、展示の構成と主な内容について、「はじめに」以下各章のパネル（一）と資料キャプションの文章および展示室の写真などを掲げ、展示方法等について若干のコメントを付す形でまとめておきたい。（ルビは一部省略し、展示時の誤り等については適宜修正した。）

なお、資料群（コレクション）の略称として、「高松宮家本」「広橋家本」を用いているが、正式名称は、それぞれ「高松宮家伝来禁裏本」「広橋家旧蔵記録文書典籍類」であり、それぞれについて既に資料目録を本館から刊行している。



図 1 特集展示「年号と朝廷」チラシ

特集展示「年号と朝廷」

はじめに

アジア漢字文明圏には、「年号制度」という文化があります。現代日本の身の回りを見渡すと、年号が多く利用されている事に気がきます。



図2 展示風景：「はじめに」

日本の前近代の公年号制度について考えてみようとするのが、今回の展示の目的です。前近代の公年号制度を考える時、朝廷との関係に注目する必要があります。改元・年号字を決定し告知するのは天皇の役割であり、朝廷がそれを補佐します。年号字の決定過程では、中国伝来の図書（漢籍）に関する情報が、非常に大きな意味を持ちます。今回の展示では、この方面にも注目しています。

第一章 時に名前を付ける

【年号Ⅱ時への命名】

前近代年号制度では、「年」に命名するという思想が重要です。漢字文明圏では、命名に当たって、ラッキーな漢字（好字・嘉字・吉字）を用いると言う考えがあります。

「好字」であることを判断する一つの基準に、しかるべき漢籍の中で良い意味の文章に使われている、という証拠（これを引文と言います）のあることが求められるようになります。

人に名前を付けるのにも、この「引文」が求められます。年号字を定めるために、候補の年号字と、その引文を集めた調査報告書が、「年号勘文」です。



図3 第1章「時に名前を付ける」

1 「親王名字勘文(写)」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

元禄十年(一六九七)、菅原豊長が皇子の命名に際し候補となる名を選び進めた勘文である。直仁・禎仁・文仁と三つの候補を示し、好ましい文字とその出典を『論語』『玉篇』『礼記』等の漢籍から引用文で示している。

2 「年号勘文(写)」 広橋家本 本館蔵 江戸時代

『柳原忠光卿年号勘文外九通』一巻に貼り込まれた享禄度(大永八年(一五二八)八月二十日)の年号勘文の写し。候補年号は時安・寛安・享禄の三つ。このうち享禄が採用された。それぞれの候補年号の出典を『周易』『毛詩注疏』『周易』の漢籍から引用している。

3 「年号字」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

東坊城長詮・清岡長時・唐橋在隆・東坊城資長・東坊城総長・五条為範の選んだ年号と原典・引用文を列記したもの。清岡長時の「寛延」が一七四八年で古い。出典と引用文は同じだが、当時の撰者は五条為範である。

4 「年号字」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

勘文をすすめた人物は前の文書と同じである。東坊城総長の「明和」が一七六四年で古い。出典と引用文は同じだが、当時の撰者は唐橋在隆である。両文書とも、年号勘文作成のための覚えとして作成された案文とみられる。

5 「迎陽記(年号勘文部類)」 広橋家本 本館蔵 室町時代

「広橋家旧蔵記録文書典籍類」の中に、『年号勘文部類』一巻(H-63-213)として収められている。今回、調査の結果、菅家系の年号勘文

部類書(十四巻本『迎陽記』の巻二部分)であることが判明した。広橋家では、他家で作成された年号勘文関係書も積極的に収集している。

6 「元秘抄」 広橋家本 本館蔵 江戸時代

『元秘抄』は菅原長成撰の年号に関する故実書で、追捕が繰り返されている。年号に使われた漢字、菅原家と他家の勘文の違い、引用漢籍や撰申者、年号の文字や音韻への批判などを列挙しており、年号選定の作業を知る上で簡便な書である。

「年号作成マニュアル」(補助パネル)

『元秘抄』は年号作成のマニュアルの役割ももっていました。巻一には、①菅原長成による撰述以前に不採用となっていた年号、②鎌倉中期の後嵯峨院以後の勘文にみえて不採用となった年号が列挙されています。

このうち、①からは天明・天保・正長・建徳・康正・正徳・弘治・応仁、②からは康暦・文明・正保・寛正・文安・応仁・延元・延文・慶長・慶安が後に採用されました。本書には勘文提出者や出典が示されており、年号の知識に関する貯蔵庫のようです。

7 「年号字 新撰」 広橋家本 本館蔵 室町時代

勘申されたことのない、候補年号字のストック集。その後、勘申されたものは右上に「へ」(合点)を付す。室町期の本集にはすでに、当然、未採用年号ながら、「天保」や「明治」が見えている。

「新年号候補字作成マニュアル」(補助パネル)

新たな候補年号字(新字と言います)と、その根拠になる漢籍の引文を考えることも、年号勘文作成のためには必要です。

代々、年号勘文を提出する(勘申、と言います)機会の多い家では、

新字・引文のストックを持っていました。

ここに展示するのは、広橋家で作った、新字のストック集です。

新字は機会を見て、年号勘文に載せられ、候補年号字の一つとなります。

やがて、候補年号字の一つが、年号字として採用されます。

ここに、年号字の履歴が生まれます。広橋家では、年号字の履歴集も作っていました。年号字の履歴集を、その隣に展示しています。

8 「年号字鈔 上」 広橋家本 本館蔵 室町時代

年号勘文に載せられた（既勘申）年号字の一覧。候補年号字の下に、勘申年月日、引文の漢籍の種類、勘申者の順に記している。採用された年号字は、年号字の左に「〇」を付す。勘申が多次に及んでも採用されない年号字、一度で採用された年号字など、年号字により履歴の差のあることがわかる。

【日本の公年号に使われた漢字】

「大化（六四五～五〇）から慶応（一八五六～六八）まで二四三の年号に使われた漢字は全部で七〇文字です。その漢字と使用回数は次の通りです。

29回 永
27回 元、天
20回 治、応
19回 長、文
18回 正、和
17回 安
16回 延、暦
15回 寛、徳、保

14回 承

13回 仁

12回 嘉

11回 平

10回 康、宝

9回 久、建、慶

8回 享、弘、貞

7回 禄

6回 明

5回 大、亀

4回 寿、萬

3回 化、觀、喜、神、政、中、養

2回 雲、護

1回 感、吉、景、乾、興、亨、衡、国、斉、至、字、朱、授、昌、祥、勝、祚、泰、雉、鳥、禎、同、白、武、福、靈、老、銅

（森本角蔵の調査を補訂した、所功『日本年号史大事典』を参考）

※一世一元制度以降の明治・大正・昭和・平成を加えると、

「治」21回、「正」19回、「和」19回、「平」12回、「明」7回、「大」6回、「昭」1回、「成」1回

となり、年号に使われた漢字は計七二文字となります。

第二章 年号を決める人々

【高松宮家本】

「高松宮家本」は高松宮家伝来禁裏本の略称であり、大正天皇の第三皇子宣仁親王の高松家の旧蔵書コレクションです。そのものになっているのは有栖川宮家の蔵書であり、天皇直筆の書物も少なくありません。「禁裏本」は天皇家の文庫の蔵書の意味であり、たとえば、「明暦」の蔵

書印を持つ書物は、その年号（一六五五～五八）が使われていた時に在位していた後西天皇の旧蔵書です。本コレクションには、年号に係するものも多く含まれています。

（高松宮家の系図『高松宮家伝来禁裏本目録「奥書刊記集成・解説編」』一三〇頁から転引）



図4 第2章「年号を決める人々」

9 「五代帝王物語」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

鎌倉時代後期の編年体の歴史書。「五代帝王」は後堀河天皇から亀山天皇に至る五天皇を指す。四条天皇の代始年号「天福」（一二三三～三四）が論難を経て決まった後、上皇が続けて崩御したので、「アサマシカリケル年号ナリ」と文中で批判している。

10 「貞永元年・天福元年改元定記（経光卿記）」 広橋家本 本館蔵 室町時代

「天福」の改元定に参加した広橋経光の記録。年号勘文を引用した部分の注記を見ると、「天福」の上に「五代晋漢年号有難。然而被用了」との書き入れがある。唐末五代の短命王朝である後晋と後漢に使われた年号という批判があったものの採用されたことが示されている。

11 「後西天皇讓位宣命」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

後西天皇（在位一六五五～六三）が靈元天皇に讓位した際の宣命の实物。朝廷としては、代始改元を実施しなかったが、当時、幕府が代始改元を許可しなかったため、靈元天皇は即位して十年後の延宝元年（二六七三）によりやく改元が実現できた。

12 「改元定 申詞（明暦改元度の申詞）」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

申詞は、上申の際の発言記録。後西天皇の年号「明暦」を決める改元定の時、「明暦」には「日」が二つ含まれていて火の不安がある、という類の論難が従来からなされていることが報告されている。「明暦の大火」はその懸念が的中したとも言える。

13 「靈元院御影」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

風早公雄（一二二一～八七）の筆になる靈元天皇の肖像画。風早家は、姉小路公景の次男実種を祖とする家であり、藤原北家閑院流に属する。

14 「日本書紀神代卷」（明暦御印を持つ図書Ⅰ） 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

『日本書紀』冒頭の二巻が木活字で慶長四年（一五九九）に印刷され

ている。慶長年間に木活字で印刷された書物を古活字本と言う。後西
天皇の旧蔵書であることを示す「明暦」の蔵書印が捺されている。

15 「行類抄」(明暦御印を持つ図書2) 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

本書は、洞院実熙(一四〇九〜五九)が編集した故実書。洞院家は、
藤原氏北家閑院流に属する。開いてある冊には「改元定」に関わる細々
とした作法や先例が記されている。本書の一部には後西天皇(一六三七
〜八五)の宸筆(天皇の直筆)が見える。

16 「院号定部類記」(明暦御印を持つ図書3) 高松宮家本 本館蔵
江戸時代

天皇が亡くなった後につけられる院号に関する作法や先例を公家の日
記から抜粋して編集した資料集。後西天皇の宸筆により鈔写されてい
る。

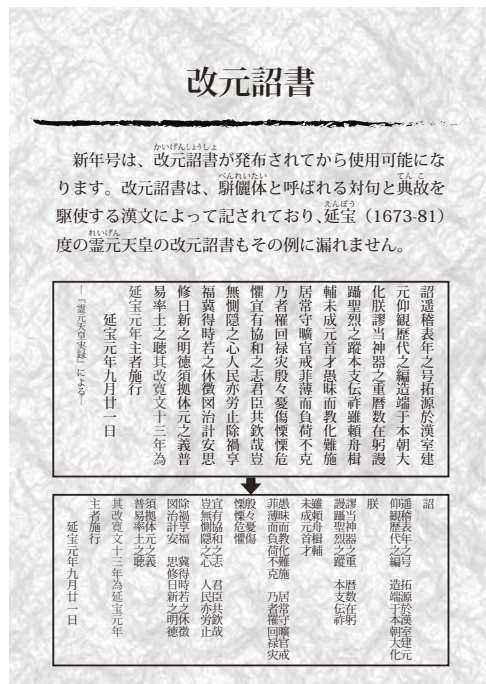
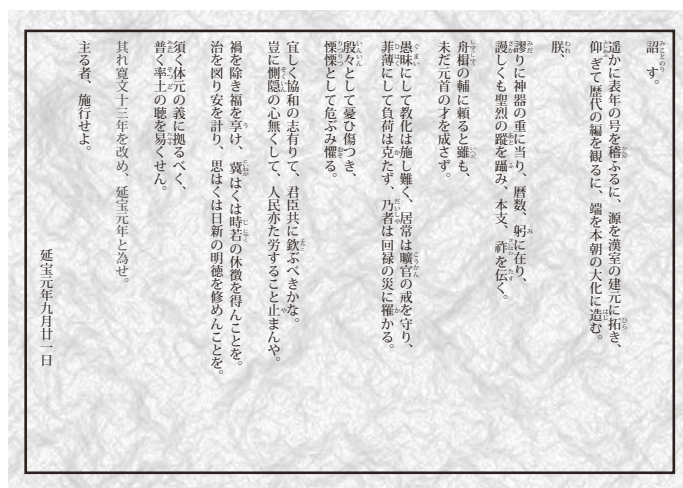


図5 「延宝」の改元詔書(『霊元天皇実録』所収
の文を「駢儷体」の体裁に改めた)

17 「年号事」(霊元天皇宸筆年号備忘) 高松宮家本 本館蔵 江戸時代
本文書は、東山天皇在位時の宝永(一七〇四〜一一)度改元の際、
霊元上皇が作成したメモ。年号字頭に符号を付し、優劣を明記してい
る。勘者の名前は「元秘別録」の記録と同じだが、リストに並んでいる
新年号案は異同が少なくない。

【改元詔書】

新年号は、改元詔書が發布されてから使用可能になります。改元詔書
は、駢儷体と呼ばれる対句と典故を駆使する漢文によって記されてお
り、延宝(一六七三〜八二)度の霊元天皇の改元詔書もその例に漏れま
せん。(図5)



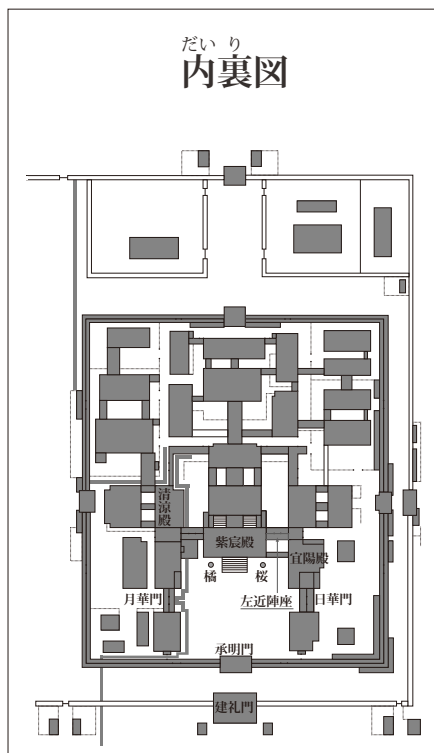


図6 内裏図（「左近陣座」の位置）

【陣座と禁裏の空間】

禁裏とは、内裏の別称で、天皇が生活し公務などを行った建物群のある空間（皇居）を指します。御所とも呼ばれました。禁裏の建物は、時代ごとの違いもありますが、それぞれその用途が決められていました。朝儀など公的な用途ではおもに紫宸殿が、天皇の住居としては清涼殿などが使われました。

「陣座」とは公卿が着座して政務や儀式、官位の叙任などを議論した座のことを指し、仗座とも言います。

また陣座で行われる評議のことを陣定と呼びます。

改元についてもこの陣座で議論されました。陣座は紫宸殿の東南にある宣陽殿西庇に設けられたこともありましたが、やがて紫宸殿の東面北廊内の南側に設けられるのが通例となります。この場所を左近陣座（左仗座）と呼び、摂関期ではここで国政が審議されました。

18 「禁裏絵図」 高松宮家本 本館蔵 江戸時代

禁裏（内裏）の各殿舎を描いた彩色平面図。江戸後期の書写。紫宸殿から宣陽殿（図では「議陽殿」）への東に渡る回廊に「左近陣座」の文字が見える。ここで公卿たちによる評議（陣定）が行われた。

19 「北野縁起絵（岩松宮本、中巻）」 本館蔵 室町時代 一四世紀

菅原道真を祭神とする京都の北野天満宮の縁起を記した絵巻物。

右大弁 源 公忠より延長への改元が醍醐天皇へ奏上される場面であるが、絵巻では頓死した公忠が冥界で菅原道真と冥官のやりとりを聞き、改元の進言へと至ったとされる。

（※チラシ（図1）や解説シート（図12）に掲載した絵である。）

（展示替え別場面の解説）

菅原道真を祭神とする京都の北野天満宮の縁起を記した絵巻物。

年号を延喜からせつかく延長に改元したものの、延長八年（九三〇）六月二六日、清涼殿に落雷。道真を失脚させた藤原時平の懐刀である藤原清貴が即死したので、改元の必要がまた生じた。翌九年四月二三日には承平に改元する事になった。

「太平記絵巻」に見える改元の理由

南北朝時代の歴史書『太平記』を絵巻にした作品。江戸時代の制作だが、『太平記』の記述を忠実に絵画化している。

康安二年（一二三六）の天変と兵革（いくさ）の場面は、改元に結びつくものであった。

（共に巻一二 高松宮家本 本館蔵 江戸時代前期）

（キャプション1）

康安二年（一二三六）年二月、都では、天変（彗星・客星が同時に出現）

が発生したため、天文博士に占わせ、その結果を報告させているところ。
(キャプション2)

同じ年には、兵革も起きた。その戦闘場面がこの図である。このように
天変・地妖までも起こった結果、康安二年九月二三日に貞治と改元した。

第三章 年号の決め方

【改元のプロセス】

天皇は、あらかじめ代々儒学・有職故実を家職にしていた人々に、年
号勘文を提出させます。(内容によっては再提出を求めることもあります。
勘文の内容について院の意向が示されることもあります。)

天皇は、提出された年号勘文を、改元定の日に、日が暮れてから、陣



図7 第3章「年号の決め方」

座へもたらし、大臣・諸卿が列座する中で、審議(仗議による改元定)
を行わせます。

改元定は、大弁の年号勘文読み上げで始まります。次に、参会者各自
が選んだ候補年号字を挙げます。その際、該当の年号字について、非難
と擁護との意見を順に述べて行きます(難陳)。

難陳の終わった後に、天皇へ報告(奏聞)します。(天皇は結果によっ
ては再審議をさせます。)

天皇はそれを受けて年号字を決定し、決定内容と改元詔書の作成とを
宣下します。(奏聞と宣下との間に、院の意向を聞くこともあります。)
参会者は決定内容に従うことを表明し、改元詔書を下官に作成させま
す。以上は中世の例です。

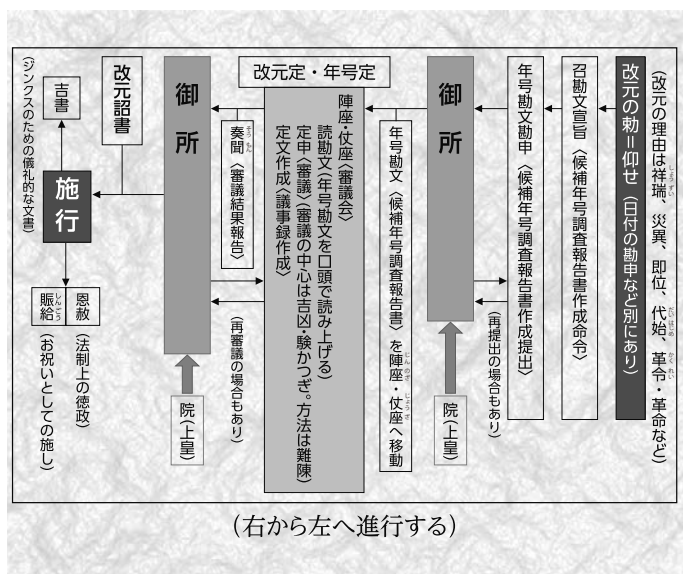


図8 改元のプロセス

【「広橋経光について」】

広橋家は藤原北家日野流の日野家の支流で姉小路兼光の五男頼資を家祖とします。頼資は四辻、又は勘解由小路と号し、子経光、孫兼仲、曾孫光業も勘解由小路の称を踏襲しました。室町時代初期の兼宣の頃から広橋の称号が定着しました。代々儒学・有職故実を家職としました。広橋経光（一二二二～七四）は頼資の息子、母は源兼資の娘です。藏人、文章得業生、左・右大中少弁、藏人頭、勘解由長官、参議、権中納言、民部卿などを歴任しました。

〔「広橋家略系図」橋本政宣編『公家事典』（吉川弘文館、二〇一〇年）四二九頁から転引〕

20 「**経光卿改元定記**」 **寛元度・宝治度・建長度** 広橋家本 本館蔵

鎌倉時代 重要文化財

広橋経光（一二二二～七四）の自筆本。経光の日記『民経記』（嘉禄二年（一二二六）～文永五年（一二六八）の記録）から抄出されたもので、寛元（一二四三）・宝治（一二四七）・建長（一二四九）の改元定の内容と勘申者・年号勘文等が記されている。

【年号勘文の正しい読み上げ方】

年号勘文の引文として示される漢文は、改元定場で読み上げられます。改元の記録に引かれている引文には返り点や添え仮名などの訓点を書き入れられていることが珍しくなく、それは読み上げを助けるために加えられたと思われます。

「経光卿改元定記」には、年号勘文読み上げの際のマニユアル部分があり、

・「右、宣旨に依り勘申」の「右」の字は読み上げない
・官位・姓名・年号字・書名・呉音で読み上げる

・その他の文字・漢音で読み上げる

・本文においては、本書（当該書の訓法）に任せて読み上げる
・訓点がない書籍は、ただ（自家流で）適宜計らって読みあげる
といったことが記されています。

（※展示では、『経光卿記』に記された年号勘文の読み方を実際に体感するために、寛元度改元（一二四三）に際して藤原光兼が勧進した年号勘文を、経光自身が記録した読み方に従って実際に読み上げ、録音した音声会場でスピーカーで流した。）

【「音声」広橋経光が読み上げた年号勘文】

広橋経光は、年号が寛元（一二四三～四七）に改められた時の改元の定において、年号勘文の読み上げを担当しました。その時に藤原光兼によつて勘申された年号勘文を、経光自身が記録しているやり方に従って読み上げています。

勘申年號事（かんがへもうすねんごうのこと）

祿長（ろくぢよう）

尚書（じようしよ）に曰（いは）く、能（よ）く王の寵祿（ちようろく）を保（たも）ち安（やす）うして、長く衆民（しゅうみん）の自生する所以（ゆへ）の道を致（いた）す。是（こ）れ明王（めいおう）の事なり。

永康（ようこう）

尚書（じようしよ）に曰く、以て迺（なんぢ）の侯（きみ）を右（たす）け、永く兆民（ちようみん）を康（やす）うするに、万邦（ばんぱう）

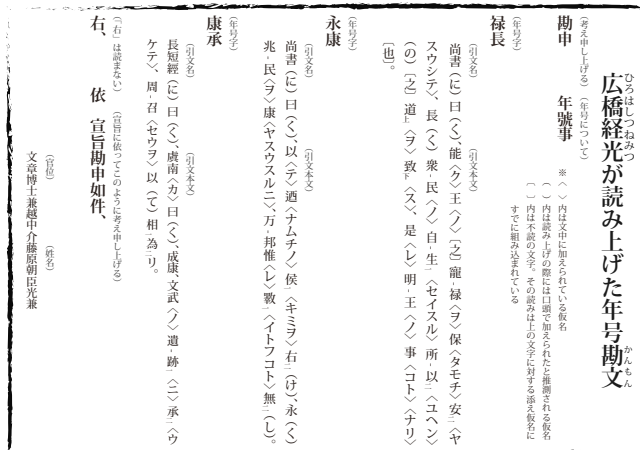
惟（こ）れ敦（いと）ふこと無し。

康承（こうじよう）

長短經（ちやうたんきよう）に曰く、虞南（ぐなん）が曰く、成康（じようこう）、文武（もんむ）の遺跡に承（う）けて、周召（しゅうじよう）を以て相（そう）為（た）り。

宣旨（せんじ）に依りて勘申（かんじん）すること件（くだん）の如（ごと）し。

文章博士（もんじようはかせ）兼（けん）越中（えつちゆう）の介（すけ）藤原の朝臣（あそん）光兼（みつかね）



〔音声〕 広橋経光が読み上げた年号勘文

広橋経光は、年号が「寛元」（1243-47）に改められた時の改元定において、年号勘文の読み上げを担当しました。その時に藤原光兼によって勘申された年号勘文を、経光自身が記録しているやり方に従って読み上げています。

勘申年號事

尚書に曰く、能く王の龍禄を保ち安うして、長く衆民の自生する所以の道を致す。是れ明王の事なり。

永康
尚書に曰く、以て遇の侯を右け、永く兆民を康うするに、万邦惟れ敦ふこと無し。

康承
長短經に曰く、虞南が曰く、成康、文武の遺跡に承けて、周召を以て相為り。

宣旨に依りて勘申すること件の如し。

文章博士兼越中藤原朝臣光兼

【年号勘文の訓点】

年号勘文の引文として示される漢文は、改元定場で読み上げられます。改元の記録に引かれている引文には返り点や添え仮名などの訓点が書き入れられていることが珍しくなく、それは読み上げを助けるために加えられたと思われる。

本資料の訓点を見ると、返り点の打ち方や仮名に現在と異なっている箇所があることに気づくと思います。レ点で済む箇所には二点が使われていたり、「古体仮名」と呼ばれる古い仮名が使われていたりしています。

（ ）内は加えられている仮名、（ ）内は読み上げの際には口頭で加えられたと推測される仮名、（ ）内は不読の文字であることを示しています。

>

図9 広橋経光が読み上げた年号勘文

21 「**経光卿記**」 自貞永元年四月一日至二十七日」 広橋家本 本館蔵

鎌倉時代 重要文化財

ひろはしつねみつ 広橋経光の日記『民経記』の一部分であり、経光の自筆本。四月二日条に貞永年度の改元記事が見える。『民経記』の現存部分は嘉禄二年（一二二六）に始まり、断続して文永五年（一二六八）に至る。その大部分は嘉禄二年より天福元年（一二三三）に至る期間に集中している。

22 「**経光卿記**」 自天福元年四月一日至十五日」 広橋家本 本館蔵 鎌倉時代 重要文化財

ひろはしつねみつ 広橋経光の日記『民経記』の一部分であり、経光の自筆本。四月十五日条に天福度の改元記事が見える。

23 「**経光卿曆記**」 自天福元年正月一日至六月二十九日」 広橋家本 本館蔵 鎌倉時代 重要文化財

ひろはしつねみつ 広橋経光の日記『民経記』の一部分であり、経光の自筆本。天福度（紙背は具注曆）について記されている。

【吉書について】

吉書とは物事の始めに当たって見る儀礼的な文書を言います。代始や改元後に吉書奏が行われた他、正月二日または三日に年始の吉書奏があり、弁官が奏する官方吉書には諸国年料米の解文、蔵人が奏する蔵人吉書には諸社祭礼などに関する文書があります。この吉書は「天文」から「弘治」に改元された際の官方吉書です。

第四章 年号と漢籍

【年号の出典】

年号の出典は、しかるべき漢籍であり、ラッキーな漢字（好字・嘉字・吉字）を選ぶのに用いられた漢籍は大半が唐以前のものです（森本角蔵『日本年号大観』参照）。「大化」から「慶応」まで計二四三の年号字を選ぶのに最も多く利用された漢籍は、『書経』（尚書）・『易经』（周易）・『詩経』（毛詩）などの儒教経典や、『後漢書』・『漢書』・『晋書』・『史記』などの歴史書、また中国の詩文選集『文選』でした。ただし、実際には『芸文類聚』・『群書治要』・『修文殿御覧』・『太平御覧』のような百科事典が引用する書名と引文を、そのまま利用した場合も少なくないようです。

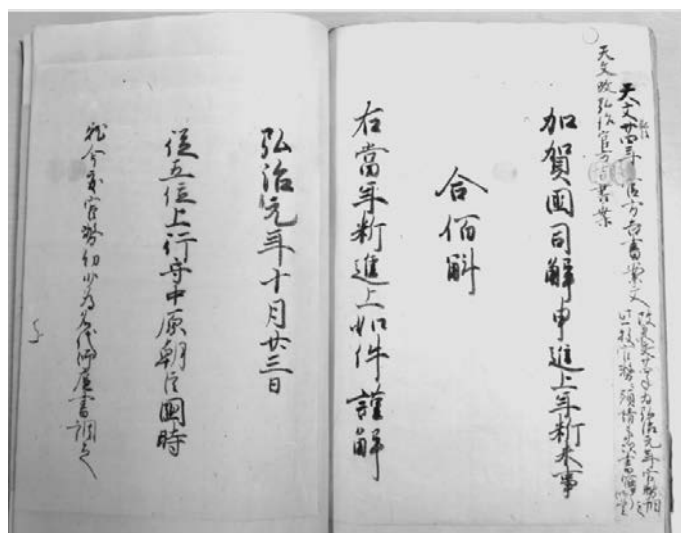


図10 改元吉書（官方吉書）の例
（「加賀国司年料進上改案（吉書）」押小路文書、国立公文書館蔵）

【出典のランキング】	
1 位	『書経』（尚書）
2 位	『易経』（周易）
2 位	『文選』
4 位	『後漢書』
5 位	『漢書』
6 位	『晋書』
6 位	『旧唐書』
8 位	『詩経』（毛詩）
9 位	『史記』
11 回	
15 回	
16 回	
16 回	
21 回	
24 回	
25 回	
25 回	
33 回	



図 11 第 4 章「年号と漢籍」

10 位	『芸文類聚』	9 回
11 位	『礼記』	8 回
12 位	『宋書』	5 回
13 位	『春秋左氏伝』	4 回
13 位	『莊子』	4 回
13 位	『維城典訓』	4 回
13 位	『貞観政要』	4 回

【本当にラッキーな漢籍は何か？】

使用頻度の高い漢籍は「出典ランキング」に見える通りですが、よく使われるということは、裏返せば、それを典拠とする年号の持続期間が短いことを示しています。

（明治以降を除き）一〇年以上長続した年号は全部で二九ありますが、その出典は『文選』（五回）、『易経』（四回）、『書経』『礼記』『芸文類聚』『群書治要』（三回）などであり、必ずしもランキングの上位ではありません。

唐の太宗の詔を受けて編纂された『群書治要』は、治世に役立つ言葉色々な書物から抜き出して編纂した書物です。本書が年号の出典となったのは三回だけですが、すべて一二年以上長続する年号となりました。最もラッキーな漢籍と言えるかもしれません。

24 「古文尚書」 古活字本 本館蔵 安土桃山時代

『尚書』（書経）は、年号の採用数が一番多い書物。本館には、古活字版の『古文尚書』が収蔵されている。「古活字版」というのは、一六世紀末から一七世紀初めにかけて鉛活字や木活字を用いて印刷された書物のことである。

25 「貞観政要」 古活字本 本館蔵 安土桃山時代

『貞観政要』は唐の太宗（李世民）の言行録。徳川家康の愛読書として知られ、他の書物六点と京都の伏見で刊行させた木活字本は、「伏見版」と呼ばれる。建仁（一二〇一～〇三）度改元以来、年号勘文の引文としてよく使われている。

26 「宋版史記」 黄善夫本 慶元刊本 一三〇巻 九〇冊 本館蔵 南宋

時代 国宝

前漢・司馬遷の撰。集解・索隱・正義の三注合刻本で現存最古の完本。（展示箇所…『史記』巻二十八 封禪書第六（第三十五冊） 第十四葉裏）南宋の慶元年間に現在の福建省で劉之問（字は元起）と黄宗仁（字は善夫）が共同で刊行した『史記』『漢書』『後漢書』の一つ。

『漢書』『後漢書』とともに南化玄興から直江兼統へ贈られ、死後に主家の上杉家に伝わり、米沢藩校興讓館旧蔵。

『史記』は二一の年号の出典になっている。

（※出典となった漢籍の展示では、実際に引文として使われた頁を開けて、その年号と、引文、読み下し、現代語訳を付した。）

【明応】

明応 めいおう 疾病流行による改元

（二四九二年八月十二日～一五〇一年三月十七日（新））

〔出典（引文）〕

『史記』封禪書

鼎宜見於祖禰、藏於帝廷、以合明応。

〔読み下し〕

鼎宜しく祖禰に見し、帝廷に藏し、以て明応に合すべし。

〔訳〕

鼎は、先祖の廟と父の廟とに示してから、宮廷に収蔵して、明らかに瑞祥に合致させるのがよろしい。

27 「宋版漢書」 劉元起本 慶元刊本 一二〇巻 六〇冊 本館蔵 南宋時代 国宝

（展示箇所…『漢書』巻二一 律曆志（第二二冊） 第十六葉表）

後漢・班固の撰。南宋の慶元年間に現在の福建省で劉之問（字は元起）と黄宗仁（字は善夫）が共同で刊行した『史記』『漢書』『後漢書』の一つ。

『史記』『後漢書』とともに南化玄興から直江兼統へ贈られ、死後に主家の上杉家に伝わり、米沢藩校興讓館旧蔵。

『漢書』は二二の年号の出典になっている。

【明暦】

明暦 めいれき 代始改元

（一六五五年四月十三日～一六五八年五月十八日（新））

〔出典（引文）〕

『漢書』律曆志上

大法九章、而五紀明暦法。

〔読み下し〕

（箕子）大法九章（を言い）、而して五紀もて暦法を明らかにす。

〔訳〕

箕子は、『書経』洪範篇に記されている「九疇」を説き、五紀（歳・月・日・星辰・暦数）によって暦法を明らかにした。

28「周易」田中穰氏旧蔵鈔本 全六帖（鎌倉写本（第一帖、第三～五帖）・

室町写本（第二・六帖））本館蔵 鎌倉・室町時代 重要文化財

『周易』は『易経』とも呼ばれ、五経、すなわち儒家の基本經典の一つである。内容は筮竹を使った占術とその原理に関わることが記されている。中世以前の『周易』の写本が揃っているものは珍しい。

『周易』は二五の年号の出典になっている。

【正中】

正中 しょうちゅう 風水

（一三三四年十二月九日～一三三六年五月二十八日（新））

〔出典（引文）〕

『周易』乾卦

見龍在田、利見大人、何謂也。子曰、龍徳而正中者也。

〔読み下し〕

見龍、田に在り、大人を見るに利ろしとは、何と謂うことかな。子曰く、龍の徳ありて正中なる者なり。

〔訳〕

「見龍、田に在り、大人を見るに利ろし」とあるのは、どのような意味か。孔子は次のように言う。竜のごとき聖賢の徳を持ち、まさしく中位（二は内卦の中位）を占め得た人のことである。

（高田真治・後藤基巳訳『易経』（岩波文庫、一九六九年）

29「元秘別録」大炊御門家 個人蔵 江戸時代

菅原長成（一二〇五～八一）が『元秘抄』の補助資料集として作成

した。改元の年月日、新年号、改元理由、勘申者、年号勘文などを年次順に並べてある。長成没後、江戸時代に至るまでのデータがほぼ途切れることなく増補されている。

【時の重みを伝える年号】

新しい年号が生まれると古い年号は使われなくなるのが常です。しかし、「文政〇〇年創業」のように、老舗が由来の古さをアピールするために、古い年号を用いることがあります。古い年号を使い続けることで、時の重みを自らの内に取り込むことが可能になるわけです。その重みは、本展で紹介した改元という行為が延々と続けられたことに起因しています。古い年号を今も使い続け、自らのアイデンティティーを維持している例として、年号を校名に冠している三つの大学を紹介します。いずれも歴史学科を持っています。

参考出品

「慶応大学ポスター」

「明治大学ポスター」

「大正大学ポスター」

【謝辞】

本展は、共同研究「広橋家旧蔵文書を中心とする年号勘文資料の整理と研究」（代表：水上雅晴）の成果の一部です。

展示物の選定と解説パネルなどの作成にあたっては、下記の研究メンバーの協力を得ています（敬称略）。

石井行雄、大川真、小倉慈司、小幡敏行、小島道裕、近藤浩之、石立善、高田宗平、名和敏光、福島金治、水上雅晴

研究メンバー以外にも、猪野毅、吉田勉、廖海華の三氏から実務的な部分に関してご協力いただいております。展示内容に関しては、所功氏（モラロジー研究所）から情報提供とアドバイスをいただいております。

特集展示「年号と朝廷」出品目録

	資料名称	時代	館蔵資料番号
第一章	時に名前をつける		
	1「親王名字勘文」	江戸	H-600-204-5
	2「年号勘文扣」	室町	H-63-238-3
	3「年号事」(霊元天皇宸筆年号備忘)	江戸	H-600-205-3-17
	4「年号事」	江戸	H-600-205-3-17
	5「迎陽記」(年号勘文部類)	室町	H-63-213
	6「元秘鈔」	江戸	H-63-186
	7「年号字 新撰」	室町	H-63-218
	8「年号字鈔 上」	室町	H-63-220-1
第二章	年号を決める人々		
	9「五代帝王物語」	江戸	H-600-744
	10「貞永元年・天福元年改元定記」(経光卿記)◎	鎌倉	H-63-200
	11「後西天皇譲位宣命」	江戸	H-600-245-5
	12「改元定申詞」(明暦改元度の申詞)	江戸	H-600-1028
	13「霊元院御影」	江戸	H-600-1654
	14『日本書紀 神代巻』(明暦御印を持つ図書1)	江戸	H-600-863
	15「院号定部類記」(明暦御印を持つ図書2)	江戸	H-600-171
	16「行類抄」(明暦御印を持つ図書3)	江戸	H-600-193
	17「年号事」(霊元天皇宸筆年号備忘)	江戸	H-600-0205-03-15
	18「北野縁起絵(岩松宮本)」(中巻)	室町	H-1169-2
	19「禁裏絵図」	江戸	H-600-929-01
第三章	年号の決め方		
	20「経光卿改元定記 寛元度・宝治度・建長度」◎	鎌倉	H-63-203
	21「経光卿記 自貞永元年四月一日至二十七日」◎	鎌倉	H-63-704
	22「経光卿記 自天福元年四月一日至十五日」◎	鎌倉	H-63-711
	23「経光卿暦記 自天福元年正月一日至六月二十九日」◎	鎌倉	H-63-845
第四章	年号と漢籍		
	24『古文尚書』(古活字版)	江戸	H-497
	25『貞観政要』(古活字版)	江戸	H-176
	26『宋版史記』●	宋	H-172
	27『宋版漢書』●	宋	H-173
	28『周易』◎	鎌倉	H-743-466
	29『改元部類記』	江戸	個人蔵
参考	慶応大学ポスター	現代	個人蔵
	明治大学ポスター	現代	個人蔵
	大正大学ポスター	現代	個人蔵
	●：国宝 ◎：重要文化財		

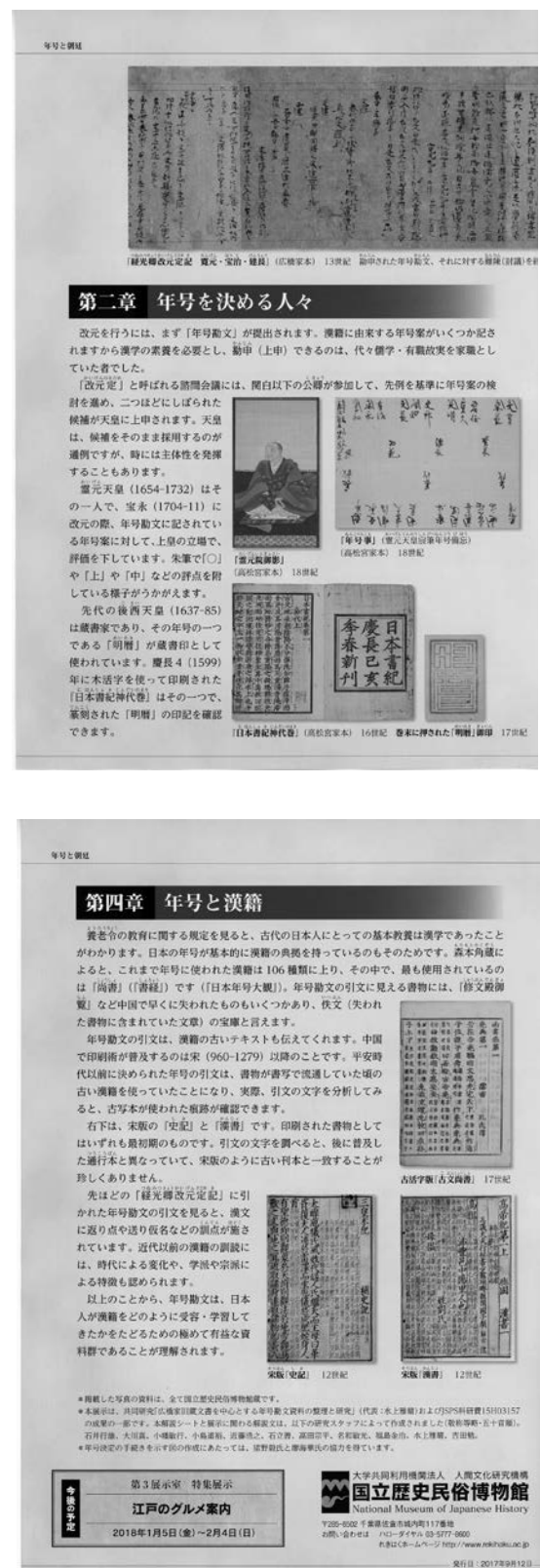
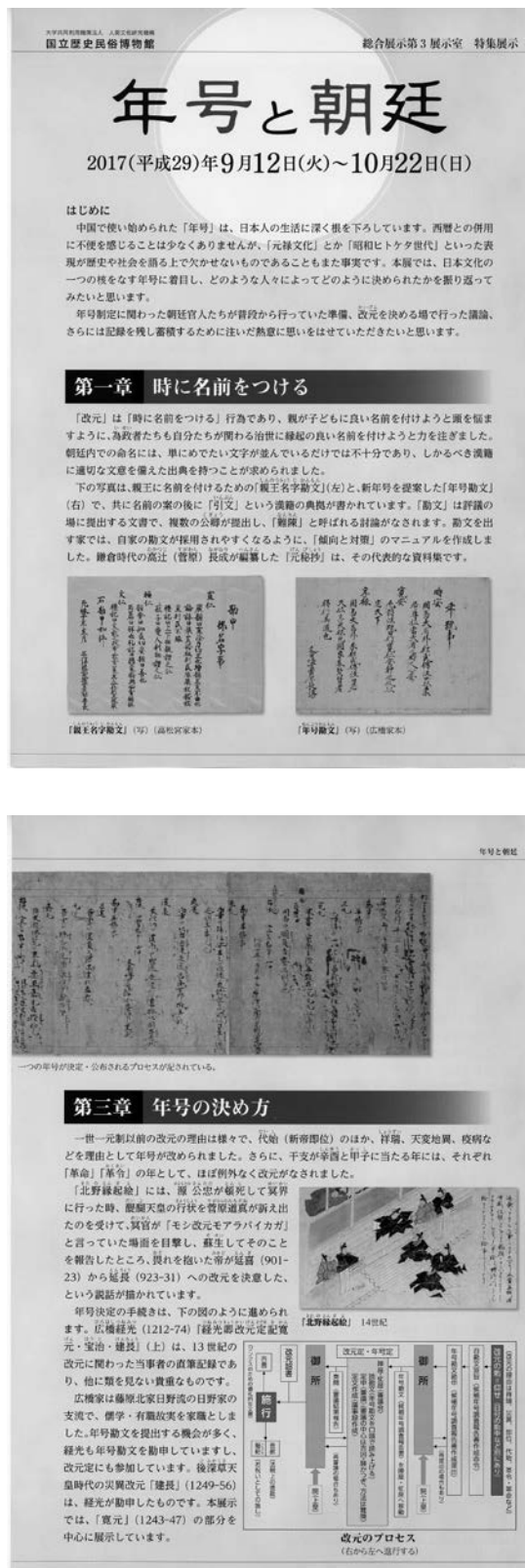


図12 解説シート

特集展示の期間中、日本における年号使用の歴史の長さとお广がりを感じてもらうために、関連企画として、総合展示の中から年号が書かれ

展示のロゴマークを入れた解説パネルを置いてその年号について説明した（図13～15）。

取り上げた資料と年号は下記の通りで、おおむね百年間隔で選定している。

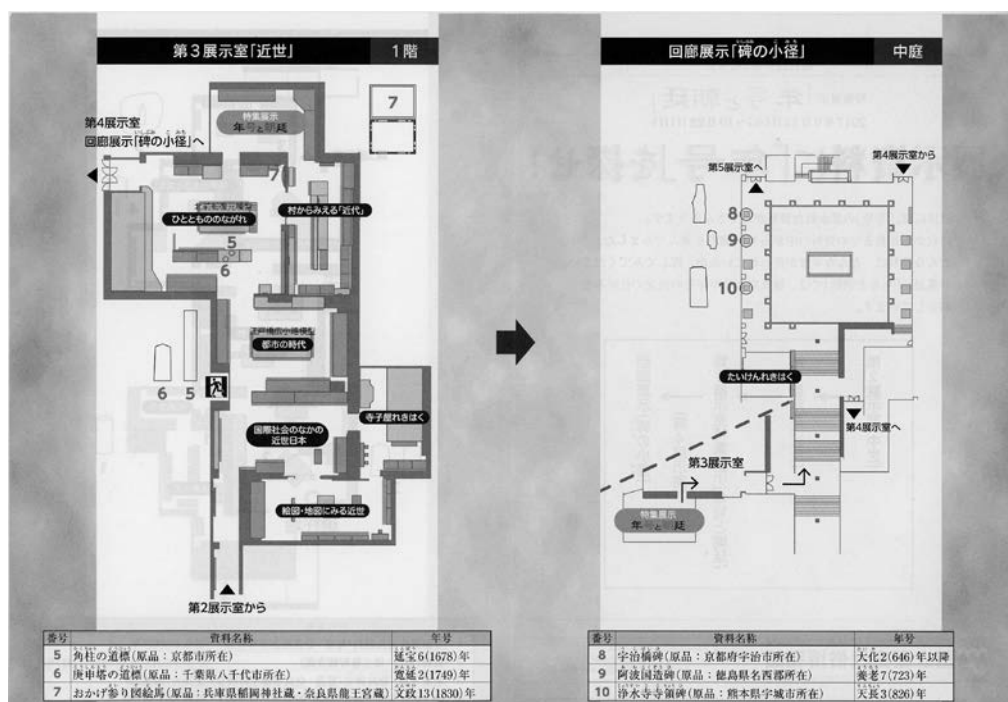


図13 ワークシート「展示資料に『年号』を探せ！」

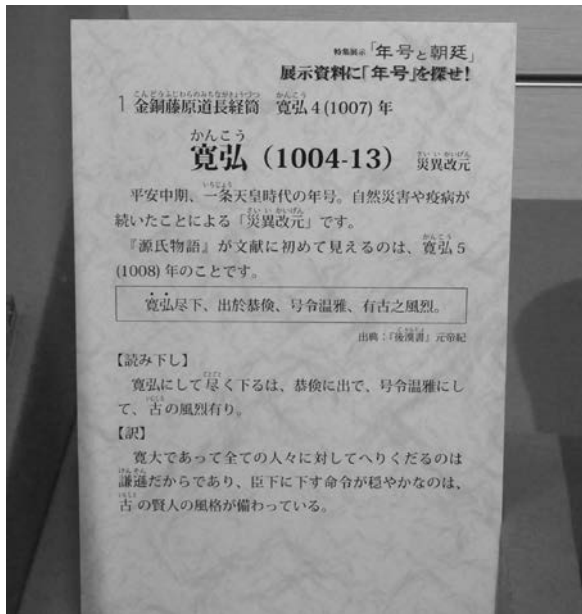


図15 ワークシート用パネルの例



図14 ワークシート用パネルの設置状況

回廊展示「碑の小径」

- ・宇治橋碑（原品：京都府宇治市所在） 大化二年（六四六）以降
- ・阿波国造碑（原品：徳島県名西郡所在） 養老七年（七二三）
- ・浄水寺寺領碑（原品：熊本県宇城市所在） 天長三年（八二六）

第2展示室

- ・金銅藤原道長経筒（原品：奈良県金峯神社蔵） 寛弘四年（一〇〇七）
- ・板碑（原品：埼玉県飯能市智観寺蔵） 仁治二年・三年（一二四一・二二）
- ・疱瘡寺蔵・徳政碑文（原品：奈良市柳生町所在） 正長元年（一二四二）
- ・織田信長楽市令制札（原品：岐阜市円徳寺蔵） 永禄一〇年（一五六七）

第3展示室

- ・角柱の道標（原品：京都市所在） 延宝六年（一六七八）
- ・庚申塔の道標（原品：千葉県八千代市所在） 寛延二年（一七四九）
- ・おかげ参り図絵馬（原品：兵庫県稲岡神社蔵） 文政一三年（一八三〇）

《関連事業》

期間中に、展示解説会（九月一二日（火）とギャラリートーク（九月二三日（土・祝））を開催した。

また、共同研究の一環としての二つのシンポジウムも、展示期間に合わせて開催し、展示資料を見ながら議論を行うことができた。

○ 歴博フォーラム

第一〇六回歴博フォーラム「年号と日本文化」二〇一七年九月一六日（土）、国立歴史民俗博物館講堂

○ 国際シンポジウム

「年号と東アジアの思想と文化」一〇月二二日（土）・二二日（日）、国立歴史民俗博物館ガイダンスルーム

展示終了後、国立歴史民俗博物館 歴史系総合誌『歴博』第二〇八号（二〇一八年五月）に、展示の内容を踏まえた特集「年号と朝廷」を掲載した。

特集解説

「年号の決め方（ただし前近代）」 小島道裕

特集1

「難陳―年号を決める議論」 水上雅晴

特集2

「広橋経光『改元定記』と年号勘文―年号を作る会議」

小島道裕

コラム1

「年号勘文に引用された佚書―『経光卿改元定記』所引『修文殿御覧』を中心に」 高田宗平

特集3

「年号に使われた漢籍」 近藤浩之

コラム2

「中国の測字術と年号の予言」 石立善

歴史の証人

「『高松宮本』の年号関係資料」 小倉慈司

展示プロジェクトメンバー（◎…代表、○…館内担当。所属は当時）

◎水上雅晴

中央大学文学部

福島金治

愛知学院大学文学部

武田時昌

京都大学人文科学研究所

石井行雄

北海道教育大学釧路校

名和敏光

山梨県立大学国際政策学部

末永高康

広島大学文学部

近藤浩之

北海道大学文学部

石立善

上海師範大学哲学与法政学院

大川真

吉野作造記念館

中川仁喜

大正大学文学部

尾留川方孝

中央大学文学部

高田宗平

大阪府立大学人間社会システム科学研究科

○小島道裕

国立歴史民俗博物館研究部

小倉慈司

国立歴史民俗博物館研究部

田中大喜

国立歴史民俗博物館研究部

（国立歴史民俗博物館研究部、共同研究副代表者）

（二〇二二年三月一六日受付、二〇二一年七月二七日審査終了）